お茶の水女子大学リベラルアーツとＦＤ公開シンポジウム

平成 21 年 2 月 12 日（木）

文理融合リベラルアーツ科目を担当して

―担当教員による報告―

地域と風土（「生命と環境」系列から）

報告者 熊谷 圭知（人間文化創成科学研究科 人間科学系教授）

最後の授業でアンケートを取りまして、その結果をまとめたものを参考までにお配りしました。

僕の授業は「地域研究」と「地域と風土」という二枚看板の授業だったのですが、風土というテーマを入れて、今までの地域研究の内容をリシャッフルしてやったというような授業でした。フィールドとしてはオセアニアと日本。日本を入れたというところがポイントというか、よその地域という形で他者化しないで、日本に最後帰ってきて、日本にも同じような問題があるのだというようなことを考えさせるというような趣旨でやりました。

一番最後に水俣の話を取り上げて、水俣病というものが拡大したことの中に、日本の風土性というものが三重ぐらいにかかわっているのではないかというような話をしました。それは水俣湾とか不知火海の非常に浅くてクローズドな湾で、漁民たちが非常にたくさん魚を食べていたことが、まずローカルな風土としてある。それから水俣という地域社会の、企業城下町の「会社ゆきさん」というような風土と、その中で漁民が周縁的な存在であったということ。さらにもう一つは、これは文化地理学者のオギュスタン・ベルクが言っているのですが、自然破壊というもの、日本が公害問題を止められなかったということの中に、日本人の主体性の問題があるのではないか。「おのずからなり」というような思想の中に、進んでいくものは認めてしまおうというような風土性。それも日本の風土性というようにベルクが言っているので、そういう三重の風土性の問題がかかわっていたのではないかというような話を最後にしました。水俣のチッソの技術者の人たちが、なぜそれを止められなかったというところの証言をしているようなビデオを見せたり。理科系の人たちにとっては、チッソの技術者の話などは、自分がその立場であったらという目でビデオを見ながら考えてくださったのではないかと思っています。しかし、全体としては反省の方が多くて、毎回問いを出してコメントペーパーを書いてもらう、時には授業課題という形でＡ４一枚の課題に答えてもらうというようなことをやったのですが、何せ時間が足りなくて、授業が５分前ぐらいに終わって、そこからコメントを書いてもらうというような無理な要求をしたので、そのあたりはだいぶ評判が悪くて、厳しいコメントが入っています。それから資料をたくさん渡しまして、「次の時間までに読んできて」というような授業だったので、これも多すぎて消化しきれなかったというような批判がありました。

例えばコメントの中で特徴的なものとしては、理系の方のコメントとして、右の方のページの３番目「理系であるとあまり考えることのない物事に対しても向き合うことができた」というようなコメントがあります。それから「一方では、非常に難しかった」と。右側の６番目ぐらいのところに「正解の存在しない問題を考えていくのが文系の研究かもしれないと思ったし、そうした問題を考えるのは人間として避けられないことなのかもしれないと思った」。こういうことに気付いてくださるというのは、とてもありがたかったのですが、しかし「答えのない問題を考えさせるとは何事だ」みたいな、そういうことをさせられたという苦痛が非常に大きかったというコメントも同時にあったということで、この辺はどのようにやっていったらいいのかという課題が残りました。

ちなみに、最後に学生に授業の採点をしてもらいました。「この授業を 100 点満点で採点してください。自分の授業への取り組みも 100 点満点で採点してください」。それで平均点は、私の授業の方については 82 点、自分の取り組みは 66 点だったのですが、この 66 点という数字が、ある意味で僕の反省事項です。つまり、自分でこれに十分取り組めたという満足感を残せなかったこと。課題が多すぎたということもあると思いますが、説明が下手だったとか、難しい話を難しく話してしまったとか、そういう課題はたくさん残った授業でした。しかし最後に期末試験をやって、その答案を見たときに、理科系の学生が非常に鋭い答案をたくさん書いてくださっていた。そういう学生たちが今後どのように変わっていくのかということには、とても楽しみな思いでいます。以上です。

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.